

歴史資料を集めて読み解くことゝ恩納間切番所の光景を中心に

恩納村史「歴史編」専門委員
 川 島 淳

恩納村は111歳を迎えました。1908年に沖縄県及島嶼町村制が施行され、琉球王国時代の行政単位であった恩納間切は恩納村に改められました。さ

徐葆光は、1720年頃の尚敬王への冊封副使でした。王文治は、1756年に尚穆王への冊封使に随行して琉球王国に派遣されました。このように、恩納間切の人々は、中国から派遣された政府高官に書の揮毫(ぎごう)を依頼しました。

かのぼつてみると、恩納間切は、1673年に金武間切の一部と読谷山間切の一部の村々によって新設されました。新設当時の村名(現在の字に相当)を示すと、以下の通りです。金武間切の恩納村・瀬良垣村・安富祖村・名嘉真村と、読谷山間切の谷茶村・富着村・仲泊村・久良波村・読谷山村(現在の字山田)・真栄田村・塩屋村・与久田村です。以後、恩納間切は、235年間存続していました。間切の中心地は、恩納村(現、字恩納)にあった番所でした。今回、明治期における恩納間切の番所とその周辺の光景などを紹介します。

上杉県令一行は、12月1日午後2時25分に恩納番所に到着します。番所の光景についても、次のような記述があります。「恩納番所の門の位置は、南側よりやや西側に面しており、周囲の垣根には、蘇鉄を植えています。右側には2枚の石で、「の形に石屏を立てています。番所の庭には芝を敷き、その南にフクギは、傘を張ったように、秀麗に立っており、門外の南東まで連なっており、古い松は道を挟んで鬱蒼と茂っています。松の上から恩納岳の嶺の姿が垣間見られます。番所のなかには、床の間の掛床に徐葆光の書「松月有餘鑿」との五文字が彫られおり、扁額には王文治の書「数峰天遠」との四文字が刻まれています。この扁額の意味は、恩納岳が唯一天界に近く高くそびえ立っており、その他の嶺は天界に遠く低いものであるといえます」(現代語訳は筆者による)と記されています。ここでは記されていませんが、この「松月有餘鑿」は、月明かりに照らされた松の美しさを詠んだものです。これらの文句に注目すると、恩納間切の風光明媚な光景が書として記されているといえましよう。



れん 聯 (徐葆光の書)



扁額の表 (王文治の書)